

# 難波渦



題字 浅野鈴秀氏（日本書芸院一科審査員）

## センターの構想

なにわ・大阪文化遺産学研究センター長 / 関西大学文学部教授

**高橋 隆博**

### なにわ・大阪の文化遺産と文化遺産学

昨今のグローバル・スタンダード化のなかで、世界では、今、新たな枠組みが模索されています。時の流れは、私たちの想像を絶するほどとめどなく速くなっており、その流れのなかで、私たちが忘れてはならない先人たちの努力の軌跡、それが、「文化遺産」です。「文化遺産」は過去の遺産にとどまらず、それは今に「生きる遺産」であり、次世代、さらには、将来に向けたかけがえのない「文化資源」と位置付けられるものであります。

なにわ・大阪およびその周辺には、貴重な文化遺産が数多く残されているのですが、なかには、未検証のまま放置されているものや、すでに失われたもの、あるいは途絶しつつあるものも少なくありません。そこで、私たちは、大阪の地に歴史的に形成され、集積されてきた「文化遺産」を総合的に研究するプロジェクトを構想いたしました。そして、このたび関西大学博物館が申請した「なにわ・大阪文化遺産の総合人文的研究」が、文部科学省がすすめる平成17年度私立大学学術研究高度化推進事業の「オープン・リサーチ・センター事業」として採択されました。この採択とともに、5年間にわたるプロジェクト推進拠点として、関西大学博物館内に「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」を立ち上げました。また、研究教育の推進拠点となる建物の建設も認可され、関西大学博物館収蔵庫の跡地に四階建ての「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」（延床面積1600㎡）を新たに建設中です（平成18年3月竣工予定）。

このプロジェクトの基本構想は、なにわ・大阪の「文化遺産」が歴史的に集積された場である社寺を中心に、祭礼や法会、芸能、学問はもとより、技術、

景観などをも含めた周縁の「文化遺産」をあわせて研究の対象とすることです。この構想を具体的に実現するために、祭礼遺産、生活文化遺産、学芸遺産、歴史資料遺産の4つの研究プロジェクトを組織し、関西大学教員のほか、他大学や研究機関の研究者、民間の専門家の方がた、さらには、大阪府下の公私の博物館や資料館、顕彰会、保存会、NPO団体などと積極的に連携を図り、それぞれの研究を深めてまいります。さらに、PD（ポスト・ドクトラル・フェロー）やRA（リサーチ・アシスタント）などが調査研究に参加することによって、若手研究者を育てていくという意義を持ってまいります。

この文科省の採択を受けて、私たちは、「なにわ・大阪文化遺産の総合人文的研究」の構想が広く認められたことを大変光栄に思い、また、この事業が、「文化遺産学」という新たな学問体系の確立の可能性を秘めていることを強く確信いたしました。その一方で、この事業は、国民の方がたからの貴重な資金を賜っており、また、多くの方がたのご理解とご支援のたまものとして創められたわけですから、重大な責任を感じております。プロジェクトを通して、なにわ・大阪あるいはその周辺地域の人びとと研究者がともに参加し、さまざまな視点を持ち込み、互いに議論することによって着実な研究成果を上げ、それを地域に還元することができたら、これにすぐる喜びはありません。

今後は、研究成果として、研究例会や合同例会、現地での講演会の開催および報告書の作成を行う予定です。また、皆様に研究の進捗状況を知っていただき、ご意見やご批判を賜わるため、年に2回、『News Letter難波渦』を発行いたします。今後とも、何卒よろしくご厚意申し上げます。

# なにわ・大阪の文化遺産

2005年1月22日(土)

会場：関西大学博物館

2005年1月22日(土)、関西大学博物館において、「なにわ・大阪の文化遺産と文化遺産学」と題し、フォーラムを開催しました。参加者は、47名でした。

はじめに、関西大学博物館長・関西大学文学部教授の高橋隆博氏により「なにわ・大阪の文化遺産と文化遺産学」と題して基調報告があり、

つづいて、パネラーの道明寺天満宮宮司・南坊城充興氏、清文堂出版(株)会長(大阪書林御文庫講副講元)・前田成雄氏、(社)大阪市中央卸売市場本場市場協会資料室室長・酒井亮介氏の3名に報告していただきました。会の進行は、関西大学文学部教授の森隆男氏をお願いをしました。

3名の報告が終了した後、参加者からさまざまな質問が出され、議論が深められました。

パネラーの3名は、当フォーラムの構想である大阪の文化遺産を守るために、日夜尽力されており、ご自身の経験をもとにした報告であったので、内容が生き生きと参加者に伝わり、会は盛況のもとに終了しました。



高橋隆博氏

## 基調報告

### 「なにわ・大阪の文化遺産と文化遺産学」

高橋隆博

なにわ・大阪文化遺産学研究センターがめざす目標は、大阪の周辺地域に偏在する伝統的文化・技術を総合的、構造的に連関させ、それを大きな研究成果に結実させていくことであります。とりわけ、歴史的文化遺産が集積されている寺社を中心とする調査・研究をすすめてまいります。寺社に組織的・歴史的・重層的に堆積しているものは、単に残っているというのではなく、そこには、先人のさまざまな創意・工夫など懸命なる努力があったのです。今後、われわれは、今日までこのような文化遺産を支えてきた地域社会の人々の歴史にまで立入って考えることが必要でしょう。

なにわ・大阪文化遺産学研究センターの調査・研究には、大阪府下の研究機関や研究団体、寺社関係者や工芸家、自治体の文化行政や文化財保存行政担当者、大学関係者がともに提携することによって、より幅広い研究ができるものと考えております。

そして、なにわ・大阪文化遺産学研究センターでは、課せられた調査・研究を一つずつ着実に検証し、具体的にはそれらを、なにわ・大阪の「遺産目録」や「技術記録」などとして刊行したり、さらには、小中高生用教材として副読本を作成したりするなど、地域社会や学校教育への研究成果の実現へ向けた取り組みを骨子として尽力してまいります。



南坊城充興氏



前田成雄氏

## パネラー報告

### 道明寺天満宮宮司

### 南坊城充興

大阪府藤井寺市にある道明寺天満宮は、孔子を祀る釈奠祭が、明治36年から現在まで100余年も続けられており、今年はちょうど102回目にあたります。道明寺天満宮に置かれている孔子像（小野篁作）については、もと栃木県の足利学校にあったものを、近世期に高松藩の儒者が江戸で発見し、はじめ高松藩でお祀りをしていました。それから、明治期の藩校廃止後は、藤沢南岳が明治6年に香川県から払い下げ、彼の私塾である泊園書院に安置して釈奠を行っていたのです。その後、私の祖父が譲り受け、大成殿を建てて道明寺天満宮に現在のようなかたちで祀られることになった歴史の変遷がございます。

また、歴史的にみても、道明寺天満宮では、明治期には、天皇や英国のジョージ5世が宿泊し、また、大正期の国府遺跡発掘調査に際しては、発掘事務所を提供しておりました。特に国府遺跡は関西大学とのつながりも深く、貴重な出土資料は、関西大学博物館で所蔵されています。

そもそも、神社の存在というものは、古ければ何でもよいというわけではなく、「日々あらたになること」によって、「コミュニティの中で皆に生かされて」存在するものであり、そこで行われる祭りについては「昔からのことを型とおりにする」ことに意味があるのです。

来る「初天神」の1月25日に、道明寺天満宮にて行われる「うそかえ祭」というものがございますが、このような伝統的な行事を継続して守っていくことは、大事なことでしょう。

### 清文堂出版（株）会長（大阪書林御文庫講副講元） 前田成雄

住吉大社や大阪天満宮の御文庫では、納本された文庫を大切に保存・管理するため、風を通す虫干しが、「大阪書林御文庫講」という書籍商の団体によって行なわれています。この「大阪書林御文庫講」はもともと株仲間から出ているものと思われます。

現在では、大阪書籍出版業の組合員は、わずかに36社ほどで、近世期に比べると、かなり少なくなっておりまして、これだけの社数で、住吉大社・大阪天満宮両御文庫の管理・運営を行なうのは、大変な尽力を要します。また、大阪天満宮文化研究所によると、文久期頃には、毎年4～5日もかけて行なっていた虫干しですが、現在の住吉大社では、御文庫が鉄筋コンクリートの建物になったことから、空調が出来るようになりましたが、大阪天満宮の方は、今でも、木箱に詰められた書物を運び、1日かけて風を通してしています。

現在、36社ある大阪書籍出版業の組合のほか、大阪には、お宮と深い繋がりを保っている何十もの講があり、それぞれ連合会を結成して、天神祭などを運営しています。大阪書林御文庫講は、天神祭の際に船渡御、陸渡御のお供をしています。また、何年かに一度は袴を着して陸渡御も行っています。ともに費用は多くかかりますが、皆の協力によって、赤字は出ていません。

大阪書林御文庫講の仲間組織や、その仲間とともに参加する住吉大社や大阪天満宮の御文庫の虫干し、さらには、天神祭の運営を担うことによって、不思議と仲間内での連帯感や充実感が生まれてくるのです。

このような仲間の連帯感・充実感を求めて、大阪の出版社の伝統的行事を継承していくことができたらと思います。



酒井亮介氏

(社) 大阪市中央卸売市場本場市場協会資料室室長  
酒井亮介

われわれ人間が生活するのに不可欠な食糧や、文化遺産としての食文化を、今、あらためて考える必要があります。

大阪は、その歴史的・地理的な条件から、古来より「なにわの津」として発達してきました。

近世期以降、物資集散地としてさらなる発展を遂げ、京都や熊野など周辺地域へも生活者や旅人を通して食文化が広がりました。さらに、すまし汁とみそ汁という「食文化」の違いから、その出汁をとるための日高昆布の流通経路が大坂と江戸では異なるなど、「食」の地域性という視点からみると、面白いことがたくさんあります。

また、日本列島の地理的条件から、古来より、中国大陸・朝鮮半島との物資の取引の影響を受けて日本の食文化が形成されました。

さらに、大阪湾と魚介類との関係について考えたいと思いますが、瀬戸内海と黒潮との関連から、明石海峡大橋から関門海峡の間にある魚島にて海流が止まるのです。また、徳島県と和歌山県の海岸では、2～3℃の温度差があるため、温度が高い和歌山では、巻き網などの大きな漁業がみられますが、徳島ではそのようなものはみられないなど、漁業の仕方が異なるのです。3月頃から大阪湾にて産卵した鯛は、鳴門海峡の岩に生息している餌を求め、明石海峡へ定着していくことなどから、大阪湾に定着している魚介類は、瀬戸内海や黒潮などの自然環境の影響を受けて生きているのあって、それは、人間の計測を超えた自然環境のなかにあるのです。

その他にも、能勢の松茸や御所柿など、淀川・大和川の水源を利用した大阪平野・丘陵地帯での果物栽培や山間部での木の実栽培のように、大阪の食文化を象徴するものが存在しております。

われわれの生活に一番かかわりの深い食文化について、是非とも大阪の地から発信するかたちで、あらためて考えていければと思います。

高橋センター長の基調報告に続いて、以上のように、3名のパネラーの方から、ご報告をいただきました。

## フロアからのご質問・ご意見

参加者A：淀川の葦を焼く行事を見ましたが、そこでは淀川の水があまり入らず、葦の生育が良くありません。しかし、四天王寺の舞楽に使用する箏箏に需要があるように、昔から、この葦でなければ困るという人たちもいるようです。また、身近な神社の注連縄作りでは、縄をどこから調達するのかということなど、われわれは、モノを作る側・神事を行なう側の立場を考え、伝統的な技術を支えているものは何か、ということに目を向ける必要があるのではないのでしょうか。

南坊城氏：本来、お正月のお年玉はお餅だったと言われることや、なぜ、年越しそばを食べるのかなど、伝統的なものには、それぞれ意味があると思います。また、能楽などのように幼い頃からの厳しい仕込みにより、芸を練磨してきた人びとの努力を思いながら、また、自分もそれに実際に触れることによって、このような芸術を見ると、また、伝統的なものに対する見方も変わるのではないのでしょうか。

参加者B：大阪の出版は、神社とのかかわりの中で展開したといわれましたが、ご報告にあった神社との関係の他、その他の神社とのかかわりはないのでしょうか。

前田氏：他の神社との接点はないと思います。ただ、出版業は、近世期に三都で栄えたのですが、大阪のようにお宮との濃厚なつながりは他ではみられないのです。これは、大阪独特の出版業の形態なのではないかと思います。

参加者B：御文庫への新刊本の奉納は、どのような意味を持っているのですか。

前田氏：まず、本がよく売れるようにという祈願の意味があります。また、頑丈な作りであるから、少しくらいの火事なら、中に

火が入らないのです。したがって、本の奉納者が火災等に遭った場合に、再販のため、自分の納本したものを借りるためという意味もあったのではないかと考えられます。さらに、御文庫は図書館のような役割も持っていましたから、本の貸出し・返却手続などは、神職の方がやっていたものと思われる。

参加者C：「天王寺蕪」など、伝統野菜の復活が高等学校などでもなされているようですが、なまものである野菜を復興するときには、どのような過程があり、また、保存にともなってどのような尽力をされているのでしょうか。

参加者D：「天王寺蕪」は『毛吹草』に「なにわのかぶ」として記載され、天王寺にかぶがあったことが分かっていました。「天王寺蕪」には毛がないために、虫がその葉を食べやすいので、廃れてしまったのです。しかし、種がなくなったわけではなかったので、天王寺の飼料店にて種を買い求めて、育てていきました。「天王寺蕪」には、現在、丸葉と切れ葉（大根の葉のような）の二つの系統が揃い、地域社会や学校での総合学習の場で紹介されています。また、このような伝統野菜を漬物にする業者も出てくるようになりました。原材料をもらって育て、野菜の復活とあわせて「なにわ漬」「塩昆布」「焼酎」などの大阪の土産物を作ろう、という案があります。その土地に住んでいる人は、その土地で出来たものを食べてきたのですから、きっとそこに住んでいる人の体に合ったものなのでしょう。したがって、伝統野菜の作られる時期、量、特性などを考えて品種改良はしないでおこうと思います。それぞれの野菜の残り得た力を大事にし、それぞれの品種の多様性を重視していくことが必要です。また、次世代につなげるため、若い人びとに食べてもらう機会をもつことも大切でしょう。例えば、玉造神社では、その地域発祥の野菜を使った料理を地域の人びとにふるまっています。このように、食べ物をきっかけに、文化の発祥の地である神社や寺に人びとが集うようになれば、と思うのですが。

参加者E：摂河泉の文化は、現在では、芦屋や浜寺など、大阪の周辺部に残されていることが多いと思います。したがって、大坂の周辺部地域の博物館や美術館と協力して事業を展開してほしいですね。また、関西大学の図書館には、近世大坂の画壇の資料が所蔵されています。自分で生業を持っていた人が、収集してこれまで所持していたものを調査し、展開できれば面白いのではないのでしょうか。

参加者F：自分が住んでいる地域には、お祭りの曜日を土日に変えるという意見があるのですが、このことについてどのようにお考えになりますか。

南坊城氏：お祭りの日は、基本的には変えてはいけないと思いますが、現在では奉仕する人びとの欠如という問題があります。そこで、折衷案として、寺社のお祭りには、総代だけを集めて行ない、行事としての渡御などは、人びとの集まる土日にすることが考えられるでしょう。

参加者F：「御所柿」を復活しようという動きがありますが、「御所柿」について何か教えてくださいたいのですが。

酒井氏：記録では、天満青物市場の大阪の青物のなかに、「御所柿」が出てきます。

参加者D：『毛吹草』や『庭訓往来』などにも出てくるかもしれませんが、「御所柿」は、昔は、菓子として梨や蜜柑と同じで重要視されていたのではないのでしょうか。当時は、甘いものがなかったので、記述が残されているのではないかと思います。また、享保期の調査記録である『諸国産物帳』の大和国の記述にも記載されているかもしれません。

当日、参加者の皆さんからいただいたご感想やご意見を次のページに掲載致しました。ご一読下さい。  
(PD：森本幾子)

# 参加者のアンケート結果より

## ● フォーラム参加者の感想

居住地域	性別	年齢	感想
吹田市内	男性	61歳以上	異分野の方々の話が面白かった。
吹田市内	男性	61歳以上	主旨は理解しました。関大・博物館だけでなく、大きな環境が構築できるといいですね。東京一極集中時代で「なにわ・大阪」と遺産について、地方的うしろ向き感を感じます。
大阪府内	女性	41～60歳	「御文庫」の話など楽しくうかがいました。保存ということでは、大阪の寺社は太平洋戦争の大阪大空襲で多くのものが灰になったと思います。何とかそのあたりのことを研究していただき、成果を出していただきますよう、よろしく願いいたします。ありがとうございました。
大阪市内	女性	10～24歳	自分が生れ育った土地にもかかわらず、目を向けることがない部分について非常に興味深いお話を拝聴いたしました。
大阪府内	女性	10～24歳	フォーラムに参加して、伝統文化としてみる文化遺産を意識でき、大変勉強になりました。なにわ・大阪の文化遺産の研究の発信地として研究センターの設立を願いたいと思います。
吹田市内	女性	25～40歳	興味深かった。実際、吹田市内でのくわいの栽培を目にすることが多く、野菜の復興にまつわる話や一覧表は楽しいものです。
北摂地域	男性	41～60歳	熱気があって充実していたと思う。実りの多い会であった。
大阪府以外の近畿圏	女性	25～40歳	お祭りの背景に何があるのか考えたことがなかった。神社合併があっても、この神社が残った理由、このお祭りが変わらずに残っている理由を考えていきたいと思った。
大阪府以外の近畿圏	女性	25～40歳	色々な人が参加できる要素があり、興味を持ちました。
吹田市内	男性	10～24歳	文化遺産と言いますと、建造物であるとか、文書・史料などが想起されますが、食文化などが含まれている点が興味深かったです。
大阪府内	不明	25～40歳	内容が多岐にわたっておもしろかった。
吹田市内	女性	25～40歳	本来あるべき姿とは一部違った形で現在に伝わっている文化遺産の話に興味を持ちました。
大阪市内	男性	10～24歳	研究範囲が幅広く、これから発展していきそうでとても興味深かった。

## ● 今後取上げてもらいたい行事など

居住地域	性別	年齢	内容
芦屋市	男性	41～60歳	祭りや市（四天王寺太子講）など今に生きる祝祭の研究（実地調査）。新しい名所図会的資料の研究。
吹田市内	男性	61歳以上	なにわ、大阪の歴史、地理等々、日本全体（または世界から見て）からの位置付けを明確に出来る何かないでしょうか。イタリアのフィレンツェにヒントがある感じがしますね。
大阪府内	女性	41～60歳	大阪町人（船場商人）の系譜・文化などにつきましては是非是非よろしく願いいたします（文献も失われたと思いますので）。
大阪市内	女性	10～24歳	高橋先生がおっしゃっていましたが、中高生向けの副読本をどんどん発信して頂ければなあと思います。今、高校で教員をしています。このような内容の本がなく、お茶をにごすような感じです。
北摂地域	男性	41～60歳	大坂（上方）浮世絵（関大図書館の長谷川貞信コレクションなど）。
大阪府以外の近畿圏	女性	25～40歳	今回の食文化など、日々の生活に関係のあるものについての講演など。

アンケートにご協力いただきました皆様、どうもありがとうございました。

## 造り物ーしじみ藤棚・猩猩舞ー

大阪の造り物は江戸時代の初期ごろから始まったといわれ、社殿の再建など、祝い事の際に氏子たちによって奉納されてきました。作り手は工夫を凝らした材料や題材でそのアイデアを競い、見る側はその出来ばえの見事さを楽しんだのです。

今年の天神祭には「しじみ藤棚」と「猩猩舞」が展示されました。「しじみ藤棚」は、かつて、大阪天満宮に飾られる造り物の定番でしたが大正15年（1926年）の「菅原道真公御神退千二百五十年祭」を最後に途絶えていました。これを天満天神御伽衆の手によって復活させたのが、平成14年（2002年）から展示されている「しじみ藤棚」です。この「しじみ藤棚」には主として淀川産の蜆が使われ、足りない分は外国産のもので補われています。淀川産の蜆は、外国産のものより大ぶりで貝殻の紫も濃いそうです。



それらの蜆をサイズ別に分け、糸でつないだものをいくつも作り、それを竿にかけてようやく藤棚は完成します。（写真上）

造り物には同種の材料のみを使って作られた、いわゆる「一式物」とよばれるジャンルのものがあります。「猩猩舞」（写真右下）は昆布や椎茸などの乾物のみで作られた一式物で、身の丈2mを超える大きな人形です。『造物趣向種 二編下』（安政7年〔1680年〕刊行）に記載されたものをもとに、再現されました。ただし、同書の通りに造ると30cmほどの大きさにしかならないため、いろいろと工夫されています。たとえば、面は「白干の鮑」とありますが、これでは小さすぎるので能面の「猩々」を使い、特徴的な赤熊は「きざみするめ」とあるところを、食紅で染めた干瓢が使われています。大きな「猩猩舞」の迫力もさることながら、ライトアップされた「しじみ藤棚」は蒸し暑い夏の夜にひと時の涼感を与えてくれます。

もちろん、天神祭の時期は藤の咲くような季節ではありません。本来見られないものを造り、その趣向と意外性を楽しむ。それが大阪人の遊び心なのでしょう。

（生活文化遺産研究プロジェクト RA:宮元正博）

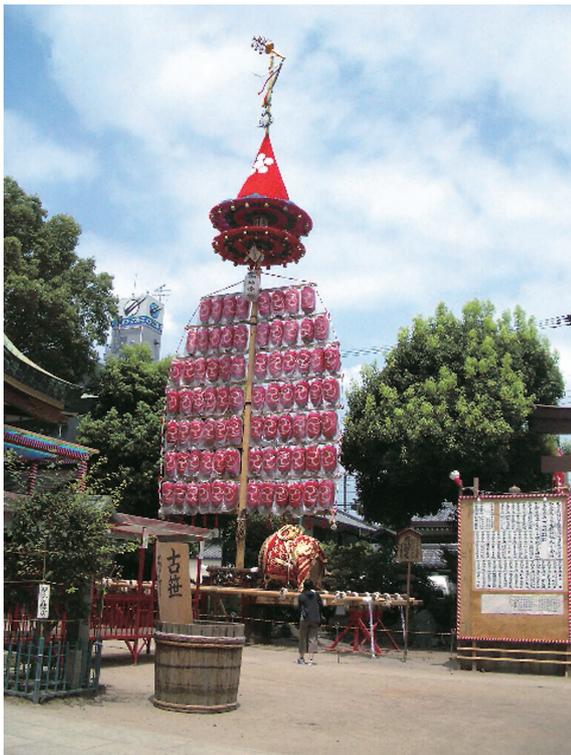


# 大阪の夏祭り

大阪の夏祭りといえば、一般には7月24、25日の天神祭ばかりがクローズアップされますが、そのほかにも大阪では、夏祭りの幕開けとされる6月30日の愛染祭から8月1日の住吉祭までの期間に数多くの祭りが催されています。

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター祭礼遺産研究プロジェクトでは、これらの夏祭りを調査し、大阪の貴重な文化遺産として映像や写真などを記録していく予定です。

月	火	水	木
6/27	6/28	6/29	6/30 愛染祭(勝鬘院愛染堂、天王寺区) 茨木神社輪くぐり神事(茨木市)
7/4	7/5	7/6 機物神社七夕祭(交野市)	7/7 龍安寺箕面開山(箕面市)山伏による大護摩供修法 金剛山蓮華祭(千早赤阪村) 星田妙見山(交野市) 七夕飾 機物神社(交野市)七夕飾 安倍晴明神社七夕祭(阿倍野区) 天満宮七夕祭(北区)
7/11 杭全神社夏祭(平野区) 生國魂神社夏祭(天王寺区) 豊太閤奉納	7/12 杭全神社夏祭 生國魂神社夏祭 難波八坂神社夏祭(浪速区) 白鳥神社夏祭(羽曳野市)	7/13 杭全神社夏祭 難波八坂神社夏祭 堀越神社夏祭(天王寺区) 五社神社例祭(池田市) 細河神社例祭(池田市) 弁財天祭(交野市)	7/14 杭全神社夏祭 難波八坂神社夏祭 茨木神社夏祭(茨木市) 平野夏祭(平野区) 杭全神社神主が来る
7/18 瓢箪山稲荷神社 高津宮夏祭 ございば・水室・子供神輿・子供の額に押印 河堀稲生神社夏季大祭(天王寺区) 呉服神社例祭(池田市)	7/19 東高津宮例大祭夏祭(天王寺区) 野田恵比須神社夏祭(福島区) 河堀稲生神社夏季大祭	7/20 東高津宮例大祭夏祭 野田恵比須神社夏祭	7/21 坐摩神社夏祭(中央区)陶器の飾り物(陶器祭) 難波神社水室祭(中央区)水柱の奉納 磐船神社酒蔵での神前結婚式(交野市) 三光神社神祭(天王寺区) 寺方の提灯踊り(守口市)
7/25 生根神社だいがく祭 天神祭船渡御 紀部神宮例祭(池田市) 佐太天満宮夏祭(守口市) 渋川神社逆祭(八尾市)	7/26 渋川神社逆祭 安倍晴明神社夏祭(阿倍野区)	7/27 渋川神社逆祭 安倍晴明神社夏祭	7/28 興覚寺ほうろく灸祈禱(土用丑日)(堺市)
8/1 住吉祭 神輿渡御祭 宿院頓宮お祓い神事(堺市) 一岡神社祇園祭(泉南市)	8/2	8/3	8/4



生根神社だいがく祭



龍安寺の大護摩供修法

金	土	日
7/1 愛染祭	7/2 愛染祭 石切劔箭神社 (東大阪市) 献牛祭	7/3
7/8 大津神社夏越祭 (羽曳野市)	7/9 大森神社灯笼祭 (第2土曜・熊取町)	7/10
7/15 玉造稲荷神社夏祭 (中央区) 玉造黒門越瓜のふるまい 茨木神社夏祭 大江神社夏祭(天王寺区) 久保神社夏祭(天王寺区) 五條宮夏祭(天王寺区) お初天神夏祭(北区) 地車囃子 八坂神社例祭(池田市)	7/16 玉造稲荷神社夏祭 感田神社太鼓台祭 (貝塚市) 日根神社ゆ祭(泉佐野市) 大江神社夏祭 久保神社夏祭 五條宮夏祭 お初天神夏祭 例大祭・官入 門真神社例祭(門真市)	7/17 感田神社太鼓台祭 瓢箪山稲荷神社夏季大祭 (東大阪市) 高津宮夏祭(中央区) 日根神社ゆ祭 春日神社夏祭(泉佐野市) 伊居太神社例祭 (池田市)
7/22 坐摩神社夏祭 陶器の飾り物(陶器祭) 難波神社水室祭 三光神社神祭 能勢妙見山虫弘会祈祷会 (豊能郡能勢町) 寺方の提灯踊り	7/23 坐摩神社夏祭 陶器の飾り物(陶器祭) 科長神社夏祭(太子町) ダンジリ・神輿 星田妙見宮妙見祭 (交野市)	7/24 天神祭(北区) 茅の輪くぐり・鈴流 生根神社だいがく祭 (西成区) 科長神社夏祭 佐太天満宮夏祭(守口市)
7/29	7/30 住吉祭(住吉区) 茅の輪くぐり	7/31 住吉祭 夏越の祓え神事 道陸神社大祓祭(貝塚市)
8/5	8/6	8/7



住吉祭神輿渡御

# 夏祭浪花の賑わい

—江戸時代の夏祭り—

現在の大阪夏祭りは、6月30日の愛染祭に始まり8月1日の住吉祭に終わりますが、江戸時代も同じく、6月(旧暦)は1日の愛染さんから末日の住吉さんまで、祭礼や夕涼みなどで賑わう月となっていました。幕末期・大坂西町奉行を務めた久須美祐雋は「当地の諸神社、六月を祭礼月となし、三郷中殊の外に賑ひ、引きものだんじり躍り杯、思ひ思ひに趣向ありて大に繁花也。(中略)六月は中旬より虚日なき程に引続て祭礼ある故、市中の群集喧しきこと也」と、祭礼月として連日賑わっていた様子を記しています。それでは、江戸時代の祭礼月の賑わいについて当時の様子を見てみましょう。

「<sup>みやのまつりてらのほうゑなになわさんけいおおすもう</sup>神社祭礼仏閣法会浪華参詣大数望」(天保12年版・大阪府立中之島図書館所蔵)は、大坂とその近接地域における神社仏閣の祭礼・法会を相撲番付ふうに見立て、祭礼の盛大さをランキングで表したものです。番付中から6月の祭礼を抜き出してみると、東西あわせて35ヶ所の祭礼がみられます。東の大関は天満天神夏祭、西の大関は住吉御祓となっており、ともに7月24～25日の天神祭、7月末日の住吉大社夏越祓と、現在でも大阪の夏祭りを代表する祭礼がその座を飾っています。前頭には、坐摩神社や御霊神社、生國魂神社や難波神社といった大坂市中の神社の夏祭りが続きますが、祭りの賑わいは社寺祭礼にかぎらず、中之島周辺にある諸藩の蔵屋敷でもみられました。

国元から送られてきた米を搬入し、保管・売却にあたっていた蔵屋敷のなかには、夏祭りにあわせて邸内に勧請した祠の祭礼を催行する藩がありました。番付の東之方2段目には、それら「御屋敷祭」があげられています。11日は宇和島御屋敷祭(宇和島藩・和霊神)、14日・中国御屋敷祭(広島藩・巖島社)、出雲御屋敷祭(松江藩・出雲社)、15日・鍋島御屋敷祭(佐賀藩・稻荷社)、16日・阿波御屋敷祭(徳島藩・二井神)、18日・筑後御屋敷祭(久留米藩・水天宮)、明石御屋敷人丸祭(明石藩・柿本人丸社)と6月中旬から蔵屋敷においてお祭が行われていたことがわかります。

これらの祭礼日には芝居・作り物などの催しがあり、邸内が一般にも開放されていました。「な





引札：正月引札の一例  
(関西大学総合図書館所蔵)

## 鬼洞文庫一枚摺について

7月1日に当センターで働き始めてから、私は一日のほとんどを関西大学総合図書館の地下書庫で過ごしています。

祭りがあると聞けば外に調査に出ている祭礼遺産研究班や生活遺産研究班のリサーチアシスタントの面々とは対照的に、私は地下に潜伏していました。

さて、現在私が主に取り組んでいる作業は、関西大学総合図書館が所蔵している鬼洞文庫の調査であります。鬼洞文庫とは、昭和期大阪で蒐書家として著名だった出口神暁氏(1907～1985)の個人文庫です。鬼洞文庫の蔵書については、山本卓氏による詳しい紹介がありますので(『鬼洞文庫』(『文学』2001年 第2巻第3号 岩波書店))、ここでは一枚摺について、ご紹介したいと思います。

まず点数は約850点。その中で最も多いのが引札で、約3分の1を占めます。中でも正月引札が多く見られます。

正月引札とは、毎年正月になると商店が顧客に配った広告でありまして、多色刷りで美しく、七福神や宝船などおめでたい図柄が特徴です。

鬼洞文庫の場合、正月引札は、大坂市中の店が配ったものが多く、呉服店や洋服店、布地を扱う店のものが多数を占めています。

また、引札以外で目を引くものはいくつと、出口氏が岸和田市出身であったためか、岸和田周辺地域の一枚摺が多く見られます。さきに紹介した引札で、店の所在地として岸和田市や堺市の記述が見られますし、堺市内の名勝について紹介している「実地測量堺市名勝新地図」、堺湊を鳥瞰し説明を加えた「泉州堺湊新地繁栄之図」、さらには「堺祥雲寺五葉松之図」や妙国寺(通称「蘇鉄之寺」)のソテツの図(「[泉州堺広普山妙国寺大ソテツの図]」(「」内の表題は筆者による。))など、堺市内の珍しい植栽を描いた図が収集されています。

以上、今回は数の多いものに着目してご紹介いたしましたが、今後は質的な面にも着目していきたいと考えています。例えば、呉服屋の引札について、同じ業種であっても、大坂市中の呉服商が配った多色刷りの正月引札と、堺の呉服商が配った白黒二色刷りの大売り出しを告知した引札とでは、出口氏の認識が異なるように思われるのです。

一枚摺一枚一枚の史料としての可能性を探るとともに、“コレクター出口神暁”の思いに触れることができたら…と思っています。

(学芸遺産研究プロジェクト RA：松本望)

### なにわ・大阪文化遺産学研究センター 今後の予定

2005年

- 9月10日(土) 研究例会(祭礼遺産プロジェクト)
- 9月24日(土) 第1回 レクチャーシリーズ「なにわ・大阪の神社」  
会場：関西大学尚文館(大学院学舎)(予定)  
報告：近江晴子氏(大阪天満宮文化研究所)  
真野修三氏(明治安田生命・関西を考える会)  
祭礼遺産研究プロジェクト
- 10月1日(土) 研究例会(生活文化遺産研究プロジェクト)(学芸遺産研究プロジェクト)
- 10月22日(土) 「河内国府遺跡」里帰り展 会場：道明寺天満宮  
報告：米田文孝(生活文化遺産研究プロジェクト/関西大学文学部教授)「国府遺跡とその出土遺物」  
長谷洋一(生活文化遺産研究プロジェクト/関西大学文学部助教授)「渡唐天神の美術」
- 11月12日(土) 第2回 フォーラム「大阪と沖縄の文化遺産」
- 11月26日(土) 研究例会(歴史資料遺産研究プロジェクト)

# 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

## センター長

高橋 隆博（関西大学博物館長／関西大学文学部教授）

## 総括プロジェクトリーダー

數田 貫（関西大学文学部教授）

## [プロジェクト]

祭礼遺産研究プロジェクト

生活文化遺産研究プロジェクト

学芸遺産研究プロジェクト

歴史資料遺産研究プロジェクト

## [研究者・研究協力者]

明尾 圭造（芦屋市立美術博物館学芸員）

有坂 道子（京都橘大学文学部助教授）

市川 秀之（大阪狭山市教育委員会学芸員）

近江 晴子（大阪天満宮文化研究所研究員）

大谷 渡（関西大学文学部教授）

小野 功龍（天王寺楽所雅亮会理事長）

北川 博子（(財)阪急学園池田文庫研究員）

北川 央（大阪城天守閣副主幹）

黒田 一充（関西大学文学部助教授）

小谷 利明（(財)八尾市文化財調査研究会事業室係長）

酒井 亮介（(社)大阪中央卸売市場本場市場協会資料室・室長）

高橋 隆博（関西大学文学部教授）

鶴崎 裕雄（帝塚山学院大学名誉教授）

妻木 宣嗣（大阪工業大学工学部講師）

西本 昌弘（関西大学文学部教授）

長谷 洋一（関西大学文学部教授）

浜野 潔（関西大学経済学部教授）

原田 正俊（関西大学文学部助教授）

藤井 裕之（吹田市立博物館学芸員）

藤田 真一（関西大学文学部教授）

前田 成雄（清文堂出版（株）会長、大阪書林御文庫講副講元）

南谷 恵敬（四天王寺執事、四天王寺国際仏教大学教授）

南坊城充興（道明寺天満宮宮司）

森 隆男（関西大学文学部教授）

數田 貫（関西大学文学部教授）

山本 卓（関西大学文学部教授）

吉井 克信（大阪歴史学会会員）

吉田 晶子（枚方市文化財研究調査会学芸職員）

米田 文孝（関西大学文学部教授）

## [ポストドクトラルフェロー（PD）、リサーチアシスタント（RA）]

森本 幾子（PD）

内田 吉哉（RA 祭礼遺産研究プロジェクト）

内海 寧子（RA 祭礼遺産研究プロジェクト）

宮元 正博（RA 生活文化遺産研究プロジェクト）

千葉 太朗（RA 生活文化遺産研究プロジェクト）

松本 望（RA 学芸遺産研究プロジェクト）

櫻木 潤（RA 歴史資料遺産研究プロジェクト）

## 編集後記

大学内の新緑が清々しい4月、なにわ・大阪文化遺産学研究センターが始動いたしました。関西大学博物館内にある研究室では、PDとRAが試行錯誤をしながら、あたらしい研究室づくりにつとめています。

とくに、RA研究員は、祭りや講演会、資料調査などがあれば、大阪府下に赴いて、汗をかきながら一生懸命調査に取り組んでいます。大阪の文化遺産を発掘し、成果を地域に還元できるように尽力してまいりますので、今後とも、よろしくお願ひします。なお、本ニュースレターのタイトル「難波潟」は高橋隆博センター長の発案です。題字は書家浅野鈴秀先生の揮毫によるものです。（PD 森本幾子）

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業  
オープン・リサーチ・センター整備事業

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター News Letter 「難波潟（なにわがた） No.1」

発行日 2005年8月1日

発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

発行者 高橋隆博

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06(6368)0095 FAX 06(6388)9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/home.htm>

E-mail:naniwa@jm.kansai-u.ac.jp

編集協力 (株)廣濟堂